碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可

神奈川　碩心会　発行

62年12月号（185号）

発行者　根岸岳萃

編集者　中村愛岳

62年12月現在会員数

逗子地区	173名
葉山地区	279名
大船地区	60名
（合計）	（512名）

実教寺久遠堂

落慶一周年大法要に参列して

守谷　崇岳

去る十一月八日、葉山の山寺、鎌倉小町ゆかりの実教寺境内に建立された久遠堂の落慶一周年記念の大法要が、いとおごそかに執り行なわれました。

奉祀されている神様は諸仏、善神の最尊最上第一の威徳身を顕現される大元師明王様で、この神様は奈良時代より明治の初期までは、皇室の御守護神で、一般が祀る事は禁ぜられていた由で、日本国内に唯一体、奈良の秋篠寺（国宝秘仏・無宗派）に奉祀されているのみで、いみじくも、皇室との殊の外ゆかりのある昭和発祥の地、葉山一色に第二体目をお迎え奉祀された事に対し深い御縁を感ずる次第です。

タメ塗りの須弥壇の内には、壱万巻の写経を修め、内陣のたたずまいは奈良の中宮寺様式で甍の三方に菊花の御紋章が燦然と輝やいております。

この御慶事法要に際し御住職より、格調高い詩吟、詩舞の奉納の御申入れに接し、謹んでお受けした次第です。

連日の不順な天候も、この佳き日を寿ぐかの様なおだやかな快晴となり、花燭（かりん）太鼓の音についで、11時45分よりの御住職の水行に始まり、司会者の佳き日を祝す挨拶に次いで、碩心会有志の吟、京愛会社中の詩舞奉納の紹介があり、最初に菊花御紋章のもと、謹んで御宝前に、明治天皇御製「海辺の雪」昭憲皇太后御歌「里神楽」の朗詠を奉り、碩心会有志並にかつての吟友も多数参加しての「神州」の合吟は、この山堂をゆるがし、葉山八景の連吟につづき詩舞に入り、伊藤京光さんのおごそかな詩舞「祝賀の詞」と平和な国に生きる喜び、倖せ、そして幾久しき平和を祈って、中村京愛先生の「日本讃歌」の、御宝前ところ狭きまでの舞に、あまたの参列者寂として声なく、最後に日蓮上人の詩を合吟で献じ奉納吟を終了。ついで花燭太鼓の奉納につゞいて法要に移り、十余名の愛らしい稚児の献花、及び献香につゞき、天童女の祭文奏上の式あり、純白の法衣をまとわれた数名の出仕の僧の読経は、韻々として堂に満ち、しばし静寂ののち、ほど走る迫力の秘妙五段修法加持を修されて、一時間有余のこのおごそかな式を終了した。当日参列された多くの方達より「深い感銘を受けた」とのお言葉に接し、一同あらためて詩吟を学んできた喜こびをかみしめた次第です。参加下さった方々、ありがとうございました。

◎ 行事予定

63年度 碩心会初吟会

と き・63年1月17日(日)10時より
ところ・京急ビーチセンター
会 費・三千円
申込〆切・62年12月20日

63年度 県本部初吟・初理事会

と き・63年1月31日(日)
ところ・横須賀市汐入・〃ぼんち〃

岳風会法人化20周年記念
第93回 全国吟道大会

と き・63年3月20日(日)
ところ・両国国技館

碩心会 常任理事会ひらかる

と き・62年12月2日(水)19時より
ところ・桜山下会館

(一)63年度初吟会に関する件

(1)11月15日第一回打合せ会を堀内会館に於て行い、堀内支部2/1・上山口・星山の担当支部の役員と企画部とで行った。以後は三支部で打合せを行う。

(2)招待者の常盤・新田・安孫子・鹿嶋の四先生に招待状発送ずみ、12月20日迄に返事をいたゞく予定。

(3)松井先生・根岸先生は当日上席師範の研修会に出席のため欠。

(4)実行委員長に上村象風、その他の役員については次の打合せ会できめる。

(5)各支部合吟の場合、指導者は担当支部に入ってもよい。又少人数の支部は他支部と合流してもかまわない。

(二)岳風会法人化20周年記念第93回全国吟道大会の出吟について

(1)参加総数全国六千名のうち左記割当

全国6,000名のうち
県本部1,149名のうち
第二地区252名のうち
碩心会259名

(2)会費二千円に対し補助の件
県本部より千円、碩心会より五百円の補助決定。自己負担は(五百円)と交通費。当日弁当記念品がでる。

(3)当日のプロ番数90番。アトラクションを入れる予定。

(4)県本部としては常盤岳湘以下一、一四九名の男女が座席で起立〃さくらの歌〃を大合吟する。

(三)広報誌の配布方法について

(1)毎月(十五日)を目安に、総本部の「吟道」「吟道神奈川」「碩心」を同時に、各地区長が加藤岳相先生迄取りにゆき、各支部へ同時配布する。(63年1月より)

(四)名簿の作成について

(1)五十周年もすんだのでなるべく早い時期にしたい。来年度に予算的にも出来ると思う。

(五)登録番号について

(1)総本部で五年毎に訂正するので変る。問い合せは総務部長又は許証部長まで。

大船地区 温習会に協力の御礼

大船地区長 森田 暁岳

三年に一度行われる大船地区大会が十一月十五日と決まり、当地区は会員数が少ないので、みんなで心を一つにして半年位前から色々と準備に入って当日を迎えました。

当日は泣きだしそうな空模様でしたが、午後からは晴れてきてほっとひと息つきました。協賛の他地区の皆様も早朝からお出掛け下さって、吟詠、立体吟、式典と見事に出来、盛会に終ることが出来ました。会場が狭く何かと不便な事もあったことと思いますが、心から他地区の皆さんの御協力に感謝申し上げます。

フィリッピンでの

慰霊祭に参加して

下山口　沼田　隆風

私達は田中大隊の戦友会を結成しています。昭和二十年、米軍の上陸を迎え勇戦、大隊長自ら斬込隊の先頭に立ち壮烈な戦死を遂げ、部隊千余名中七百余名もこの地に散華した。よって田中大隊を偲び、ゆかりの地フィリッピン、ミンダナオ島・ザンボアンガに慰霊碑を建立した。

五十年に除幕式を行って以来、三年に一回はお参りに行こうと現在まで続けられ、私は五十二年の三十三回忌と今回四十三回忌と二回参加した。

街の表玄関は近代化されすっかり変ってしまったが、一歩中に足をふみ入れると四十年前と全く変っていない。戦友15名と遺族15名の編成で、マニラから又国内機に乗り替え一時間半でミンダナオ島・ザンボアンガ飛行場に着くのであるが、今あらためて見下す密林の其処此処に、祖国の勝利を信じつゝ倒れた戦友が、一骨の収集もなく寂しく眠っているかと思うと感無量であった。その夜はホテルで早目にやすむ。

二日目市内観光。そして市役所、警察署を表敬訪問。市長は、政情不安と治安が悪いと噂が流れているがそんなことは絶体ない。安全の為、墓参、慰霊祭にも軍隊が守ることを力説された。そして見物に行く車にも警察官を乗せて守ってくれた。

三日目、サンロケで慰霊祭。ここは田中大隊本部あとで、戦争中椰子林も焼野原になったが、戦後植えた椰子林だそうだが当時と変っていない。只今より慰霊祭を行うから集合と号令がかかる。元小隊長の力強い祭文の朗読に始まり、元本部准尉の読経、各隊毎、遺族の焼香に移った。

弟…兄貴やっときたぞ。淋しかったろう。安らかに成仏してくれよ。

妻…生き残った皆さんの好意でやっとここまで参ることが出来ました。おそくなって本当にすまないと思っています。

姉…生還者の皆様達のお世話でここにきました。あなたの孫が四人、みんな元気でいますよ。どうか安らかに眠って下さい。

子供…お父ちゃん！あとは涙で声にならず号泣。あとで聞けば父親の出征時は生れて三ケ月だった由、父の顔も知らず、墓前にてお父ちゃんと云った時、突然父親が目の前に現れたようだったと。無理もない。

私は最後に墓前にて、乃木希典作の「凱旋」をやらせて戴き〝愧ず我何の顔あって父老に看えん〟の文句が大隊長の心情にぴったりとほめられた。吟じ終ってから「田中大隊長と軍神乃木希典とは精神的には全く同格だと思う。ではなぜ自殺に等しい斬込みをして戦死してしまったのか。生きて帰っていたらおそらく頭をまるめて、戦死者の家を廻って仏を弔っていただろうと思う。これも長い間の軍隊教育と、部下千三百三名中戦没者七百七十五名の責任を取ったものと思われる」との主旨を、昔の一兵卒が元将校下士官の前で堂々とおしゃべりできたのも時代の移り変りでしょうか。

夕食には現地の方々を招待してサヨナラパーティー。市長始め比島側65名、日本側30名にて盛大に行われた。比島側子供達のおどり、日比女性合同の「ここに幸あり」のコーラス、私も依頼があったので、民謡「津軽山唄」をうたわせていただきました。

翌日の比島の新聞に今回の墓参の記事がのり、墓参は非常に有意義であった。

気の腹己人

気は長く心を丸く腹立てず
己小さく人を大きく

浮世わたらばとーふのように
まめで四角でやわらかに

練吟メモ

○古くはツルギノマヒとかケンマイ（ケンバイ）とか称して、剣を振るって邪神や悪霊を退治する神楽舞いや、念仏踊りのようなものがあった。現代の剣舞は、それらとは本質的に異なるような気がするが、でもその変形したものだとする説もある。が、いずれにしても、江戸幕府も終りに近い安政のころになって、江戸の書生や塾生どもが酔ったあげく、山陽の詩などを吟じながら、刀を抜いて舞ったのが剣舞の始まり、というのが本当のように思えるがどうか。

○明治のご維新になって、旗本直参をはじめ、諸藩の武士は扶持をはなれ、生活に困る者が多かった。将軍家の警備役をつとめていた榊原建吉も当然失業していたが、ふと相撲興行にヒントを得て剣術試合の興行化を考えだした。そして、明治六年の春、浅草の露天に小屋がけして十日間の撃剣興行を始めた。これが大評判をとったため、たちまち同じような興行が続出した。これらの興行は、いろいろの趣向で行われたがいずれも本命は、今でいう剣舞であった。吟者、舞者ともに袴着用で、舞者は、詩吟に合わせて刀、扇、槍、長刀（なぎなた）などを使って多彩な武技を披露した。

○翌明治七年十一月には、早くも和歌山の町へ、京都からの撃剣興行の一座が船で来たという。座員は百名近くでうち剣士は六十六名であった。興行の前二日にわたって化粧した女流剣士を牛車に乗せ、その周囲をひげだらけ、髪ぼうぼうの剣士達が、刀槍を携え、赤や紫ののぼりを立ててデモる行列は町の人々を驚かせた。さてこの一座の出し物は、陣太鼓の鳴りひびく中、剣士間の派手な試合展開を主とし、時には一番剣士と客（旧幕臣）との試合など行った。剣舞の際は「吟詠を行う者が琵琶奏者とともにあらわれた」ということである。

○明治三十年ごろには、娘の剣舞が盛んになった。浅草公園六区の清明館では見世物として興行された。ドンチャンと鳴物入り、ほら貝の音もまじってにぎやかだった。娘は、日本髪に向う鉢巻の白だすき、白いはぎもあらわに、白に黒線の袴をもも高に端折り、詩吟に合せて舞台せましと暴れ回った。一回の興行三百六十人入りを一日六回以上繰返したという記事が残っている。これらの興行も、後年は九段の招魂社の祭日や、地方の大祭りなどによく見かけられたというが、活動写真（映画）が盛んになるにつれて、いつしか消滅してしまった。

偕老同穴について

偕老とは詩経の「邶風・擊鼓」の中に、〝死生契闊、子と説を成せり、子の手を執りて、子と偕に老いんと〟とあり、出征兵士が子（妻）を思う情を述べたもので、生きては共白髪となるまでともに生きよう、という意である。また同穴とは「王風・大車の中に〝穀きては則ち室を異にするも、死しては則ち穴を同じうせん〟とあり、女子の心情を述べたもので、生きているときはたとい別々であっても、死んだときは墓穴を同じくして夫婦の縁を全うしたいと、男女のかたい契を述べたものである。

（入　会）

817 塚越正山(再)葉山町堀内九七五
(電)〇四六八ー七五ー八一三二

（退　会）

95 鈴木美風（諏訪）97 松永翔風(死)（大船A）
200 坂井田州山（銀詠）288 松原幸風(死)（沼　間）

今日は12月8日の開戦記念日、あれから四十数年…。奇しくも比島墓参の記事あり感無量です。今年は例年になく早く雪が降りとまどいました。どうぞ風邪などひかぬ様くれぐれも気をつけ、よいお正月をお迎え下さいますよう。